

第2回農林水産業の輸出力強化ワーキンググループ 議事要旨

1. 日時：平成28年2月19日（金）17:15～18:14

2. 場所：官邸4階大会議室

3. 出席者

（政府側）

石原経済再生担当大臣（座長）、菅内閣官房長官、森山農林水産大臣（副座長）、世耕内閣官房副長官、齋藤農林水産副大臣、高木経済産業副大臣

古谷内閣官房副長官補、藤井内閣官房内閣審議官、山口内閣官房内閣審議官、金杉外務省経済局長、佐川財務省関税局長、福田厚生労働省医薬・生活衛生局生活衛生・食品安全部長、佐藤農林水産省大臣官房総括審議官、櫻庭農林水産省食料産業局長、片瀬経済産業省通商政策局長、羽尾国土交通省大臣官房物流審議官、蛸名観光庁次長

（有識者・敬称略）

大西洋（株）三越伊勢丹ホールディングス代表取締役社長）、岡田晃（株）ANA Cargo代表取締役社長）、木村敬（JA全農ミートフーズ（株）代表取締役社長）、小島順彦（三菱商事（株）取締役社長）、齋藤一志（株）庄内こめ工房代表取締役）、長尾裕（ヤマト運輸（株）代表取締役社長）、中山勇（株）ファミリーマート代表取締役社長）、西英司（北海道漁業協同組合連合会代表理事副会長）、深澤守（一般社団法人青森県りんご輸出協会事務局長）、茂木友三郎（キッコーマン（株）取締役名誉会長）

（外部有識者・敬称略）

羽田正治（九州農水産物直販（株）代表取締役社長）、涌井徹（株）大潟村あきたこまち生産者協会代表取締役）、高橋元（株）クボタアグリソリューション推進部担当部長）、有路昌彦（近畿大学准教授（株）食縁代表取締役社長）

4. 概要：

○ 外部有識者から各々の取組について発言。主な発言は以下の通り。

【羽田 正治 氏（九州農水産物直販（株） 代表取締役社長）】

- ・九州に農業の後継者を残していくため、九州の経済界と一緒に会社をつくり輸出に取り組んでいる。

- ・香港の有力スーパーマーケットグループである Dairy Farm 社の「九州産農水産物コーナー」に青果物を直送している。
- ・福岡大同青果の C A コンテナシステムを導入して、海上輸送に取り組んだことにより航空便の 10 分の 1 に削減。また、Dairy Farm 社と直接取引することにより、中間流通コストを大幅に抑え、利益を生産者や現地の消費者に還元するというコンセプトで取り組んでいる。
- ・現在の売上額は月 1,000 万ほど。4 月には 4,000 万円まで拡大したい。

【涌井 徹 氏（（株）大潟村あきたこまち生産者協会 代表取締役）】

- ・インドネシアに、日本農業の近代化と 6 次産業化システムを輸出するための調査を JICA の予算で開始する。
- ・インドの食品加工専用工業団地開発事業にも参加する予定。
- ・中国への離乳食の輸出や、アメリカ・ヨーロッパ向けグルテンフリーパスタ・冷凍寿司・パックライス等の輸出、インド向けパックライス・冷凍寿司等の輸出に取り組む予定。
- ・大潟村に農産物・加工品輸出促進協議会を設立する準備を進めている。また大潟村と周辺市町村で連携を行い、輸出用のパックライス工場の設置に向けた準備を行っている。
- ・TPP で輸入される 6 万トンのコメを、秋田でパックご飯やアルファ化米粉にして生産して、海外に輸出できないか。A-FIVE やクールジャパン事業などと連携した取組をぜひ秋田で進めていきたい。

【高橋 元 氏（（株）クボタ アグリソリューション推進部 担当部長）】

- ・5 年前から香港・シンガポールにおいて日本米の輸入・精米・販売事業を行っている。海外に輸出されている米のうち、20%はクボタグループが輸出している。
- ・日本との市場性の違いを分析したところ、香港やシンガポールでは外食産業の市場が 9 割と大きいことから、外食向けの米を中心に輸出。こういった海外でのニーズを捉え、「プロダクトアウト」（あるものをだす）から「マーケットイン」（客がほしいものを作る）への転換を図っている。そうした海外ニーズを農家側にもフィードバックしている。
- ・当社では玄米で輸出し、現地で精米をしており、日本の精米技術や保冷倉庫などに加え、日本品質を維持する様々な機器や技術を導入し、安全安心な日本米を販売。

- ・現地では炊飯の手法が浸透していないので、業務用炊飯器を200台近く導入している。
- ・現地のメディア等を活用して日本産食材のPRを進めるべきではないか。

【有路 昌彦 氏（近畿大学准教授（株）食縁 代表取締役社長）】

- ・食縁では、養殖ブリのフィレ加工、冷凍での輸出を行っている。
- ・自分は研究者であり、国内外の水産業の展望を分析した結果、国内は需要減、海外では需要増と見込まれたため、4年前から事業を開始。
- ・ブリはにおいが苦手と嫌われているケースがあることから、においをとる取組を実施。エサ業者との協力によるにおわないエサの開発のほか、冷凍時の品質保持、ICTによるクラウド管理などを行っており、工業のように均一なものを作れるようになっている。
- ・弊社はA-FIVEが50%出資するほか12社が出資しており、近大では養殖の技術支援を行っている。海外に売り込み、地域の活性化につなげるのが弊社のポイント。使える技術はどんどん導入する。
- ・世界のマーケットの獲得のためには、オリンピックに向けてという意味でも環境認証の獲得が必要であるが、わが国でこれまで作られていた認証制度は世界に通用しない。
- ・完全養殖による持続可能性のあるスキームを日本から発信していきたい。

○ 外部有識者との意見交換。主な質疑・コメントは以下の通り。

（菅官房長官）

- ・涌井氏が現在取り組んでいる内容について教えてほしい。

（涌井氏）

- ・パックスを委託加工して販売している。アルファ化米の試作もやっている。アフリカなどで使える可能性がある。

（石原大臣）

- ・パックスはグレードの高い商品として輸出するのか、それとも安く量販するのか。

（涌井氏）

- ・安く利便性の高い製品として輸出していきたい。生産コストを下げる取組の集積で生産効率を向上させ、付加価値を付けた商品としたい。6次化が遅れている秋田でやることが重要。

(石原大臣)

- ・天然と養殖のブリでは、どちらの方がおいしいとされているのか。

(有路氏)

- ・最高級のものだと天然の方がおいしいが、平均値でいえば養殖の方がおいしい。また価格は4～5倍養殖の方が高い。

(森山大臣)

- ・炊飯技術の普及や他の食材とのセットでの売り込み、精米技術の売り込みは重要だと考えている。また、現地の生産者は多収穫米に変えてやっていくと言っていたが、生産サイドとはどのようにコミュニケーションを図っているのか。

(高橋氏)

- ・米だけで売り込むのではなく、肉とコメのセット、静岡の茶とのセットなど、現場では他の食材とセットにする話を進めている。
- ・玄米は数年持つので、精米システムと一緒に売り込むことができないか。備蓄を行っている国にシステムを売り込めればと考えているが、まずはそのような国に精米について理解してもらうため、1拠点は精米所がないといけなと考えている。
- ・生産サイドとのコミュニケーションは、弊社の国内にある販売会社を通して行っている。また、県庁の農林水産部等を通じても行い、営農指導員や普及員等で輸出用米の実証実験などを通じて、新しい栽培方法等を始動して頂かなければならないと考えている。

(森山大臣)

- ・宮崎以外の各県のJA・経済連は出資していないのか。

(羽田氏)

- ・私が経済連の会長の時に、九州全体でやろうと呼びかけたが頓挫したので、今のようになくなった。

(森山大臣)

- ・野菜にしろ果物にしろ、本州や東北などとも連携して、産地が協力してリレー出荷できる体制が大事ではないか。

(羽田氏)

- ・オールジャパンで取り組めればいいが、各県の考えもあり、難しいところもあり、ま

ずは九州でやろうと考えている。香港でも各産地が競争して相当のコストがかかっており、一度そのコストの数値化をしてみないとコストは実感できない。

(茂木委員)

- ・羽田氏に質問。香港では Dairy Farm 社との直接取引を行っているとのことだが、今後、他の国でどのように展開していくのか。
- ・高橋氏に質問。香港やシンガポールでは、外食向けがほとんどだが、将来は小売り、家庭用も販売拡大していくのか。
- ・有路氏の話は、なぜブリが売れないのかを分析して対応したのは素晴らしいアプローチ。他の品目を輸出する際にも参考になるのではないか。

(羽田氏)

- ・まずは、香港で成功させてから、他の国に拡大させていきたい。Dairy Farm 社は、香港以外の国にも店舗をもっているが、香港の店舗への供給も対応できていない状況。余ったものを輸出するだけではなく、海外のニーズに合ったものを産地で作って輸出していきたい。

(高橋氏)

- ・家庭用の消費量は少ないので、外食を対象に販売している。昨年から、現地で精米したものが日本で食べたごはんと同じであることが分かってもらえるようになってきた。小売と組んでプライベートブランドとして販売する予定。シンガポールの店舗でも4月から棚を設置してもらえることとなり、まだ少量ではあるが今後家庭用も展開していきたい。

(中山委員)

- ・日本農産品の輸出は、コストが高く、また、リードタイムが長いので生鮮品の場合、品質に問題が出てくる。涌井氏の日本の農業システムを輸出するというアイデアは良いが、さらに一歩進めて、日本の農産品を現地で作るという考えもあるのではないか。日本の商品の中でも松竹梅、高いものと安いものが全部並ぶようになれば、裾野が広がって、高級品ももっと売れるようになるのではないか。低価格品は現地で生産し、高級品は日本で生産して輸出してはどうか。
- ・弊社（ファミリーマート）が販売しているタイから輸入したフライドチキンや、タイで販売されているとんかつがおいしいのは、飼料の中のコメの配分が多いから。飼料用米には難しい点があることは承知しているが、日本の畜産業でもコメを多く飼料に

使って生産した上質な肉を輸出してはどうか。

（涌井氏）

- ・インドネシアで農業をやらないかと誘われたが、田んぼが整備されていないので、コンバインを入れられない。灌漑排水、用水路の整備などの農地基盤整備と、日本の6次産業化の仕組みをそっくり向こうに持っていきたい。
- ・また、東南アジアで生産したコメは、天日干しにするので、2～3割も砕けてしまう。砕けない日本の乾燥技術を導入するとともに、砕けてしまったものはタダ同然なので、これを米粉とし、パン、麺に使うのがよい。

（森山大臣）

- ・涌井氏からの、TPPでコメが約6万トン入ってくるという話について。ミニマムアクセス米は77万トンの輸入義務が課せられているが、TPPでは約6万トンの枠を設けるものの、輸入義務が課せられているものではないため、実際にどれだけ入ってくるかは分からない。

（涌井氏）

- ・ではそのMA米の77万トンを使えばなおよい。そのまま輸出するのはダメでも、日本固有の技術で加工すれば輸出してもいいのではないか。

（農林水産省佐藤総括審議官）

- ・MA米の扱いについては確認する。

○ 石原経済再生担当大臣の発言

今日は興味深い話を聞かせてもらった。次の世代が生産現場に夢を持って入っていく仕組みを作っていくためにも、日本の良い生産品を海外へ売り出していくことが重要。本日のご意見をしっかり踏まえて、今後も議論を深めて、輸出戦略を作り上げたい。また、農商工でしっかり連携して、農産品と関係する陶磁器など日本の産品とをセットで海外に売り出していければと考える。

以上